

リーザ・フリッチュの手記 (3)

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

(2012年10月1日 受理)

(承前)

朝には朝日の下でマーリエンブルク³⁸の街を見たのです。私たちが持っていた荷物は帽子入箱が一つとアコーディオンが一つ、それに、それぞれ一つの小型トランクだけでした。大きな荷物は前もってモスクワに送っておいたからです。アイトクーネン³⁹で国境を越えました。リトアニア、ラトヴィアを通してロシアに入りました。そのピゴソヴォ⁴⁰で税関検査を受けねばなりませんでしたが。税関で中年の紳士が私たちの隣に立っていたので、言葉を交わしました。彼と私たちだけがベルリンから汽車で来た乗客でした。他の乗客は移動の途中でそこで遭遇したのです。その人たちはドイツではもはや入手困難となった若干の品々を入手する為にまだ当面のところ、リガ⁴¹に居たのです。私たちは迅速に税関検査を済ませました。私は帽子入箱に鉛で封印しました。その箱の中には私たちの書籍が入っていました。そうしなければ持ち込み出来なかったでしょう。中年の紳士は最後に来ました。というのは、彼は日本に向かう化学者であって、ロシアの税官吏が厳しく検査しなければならない物を何点か所有していたからでしょう。私たちが殆ど検査されなかった際に何度か、Dさんは、私はその名前を忘れてしまったのでそう呼びますが、確か『園亭』と言う名前の本などの書籍を自分のトランクからカウンターの下で、私たちが開ける様に封印しておいた、私の帽子入箱に移し、道中で読物を満喫できる様にしたのです。

彼もまた税関をうまく済ませたのです。汽車の中で2等車に乗っていたのはエーファと私だけでした。同行した他の乗客は全員が1等車でした。騒がしいロシア人たちの下で、たった2人だけにいるのはちょっと不気味でした。しかし私たちは5月1日に無事モスクワに到着しました。そこでまたDさんに遭遇しました。駅で4時間も拘束されてしまいました。私たちにメーデーの大パレードを見させない為にです。その理由は後で分かったのです。それからメトロポール・ホテルに行きました。古いけれども豪勢な建物でした。まず私は私たちの大きな荷物の事を気に掛けました。しかし、5月3日以前には税関から受取る事は出来ないと言う事だけしか分かりませんでした。私たちの為に大使館は何も出来ませんでした。私は非常に絶望してしまいました。5月2日に荷物なしで更に旅を続けるのか、出発を遅らせて、次の汽車を待ってモスクワに留まるかと言う問題に直面したからです。滞在を伸ばすお金はありませんでした。というのは、モスクワでの滞在費用は既

にドイツで支払済でしたから。翌朝、朝食の際に、支那から来た両親の知人に会いました。その人に私の苦痛を訴えました。彼は私をなだめて、同様の事態が彼にも生じている旨を語りました。彼ならば総て荷物をインツーリスト⁴²に委ねるだろうし、そうすれば万事うまく行くだらう、との意見でした。それで、私はインツーリストに行って私の問題を説明しました。彼らは私たちの荷物を引受けてくれました。私は荷物の鍵を引渡さなければならず、私が持っていた最後の米国通貨で運送費を支払いました。私が買ったインツーリストの9個口の荷物受取証が、後に送られるであろう荷物の唯一のしるしでした。インツーリストで私は、Dさんと私たちが車輛の真中の車室を獲得出来る様に強弁しなければなりません。というのは、両端の車室は人が何時も通るのを感じるのだからです。私たちの車室には共用の洗面所がありました。私は中年のユダヤ婦人と知合いました。彼女は他人が来ると個室にこもっていました。ロシア人たちは男も女も同じ車室に入れられていました。途中Dさんは時には相客が1人いましたが、大抵は1人で居ました。ピゴソヴォでの私たちの策動の御蔭で読物が若干ありました。そして、私がシベリア鉄道旅行の為に気を使って準備したトランクは、残念ながら、まだモスクワに残されたままです。私たちはしばしばDさんと一緒にいました。この鉄道旅行はソ満国境まで7日7晩続いたのです。食事料金は鉄道料金と一緒に、道中困らない様に、支払済でした。私にお金は殆ど残っていませんでした。満洲里に到着する直前に、ずっと列車に乗車していたインツーリストの係員に私たちが預けた荷物の世話をしてくれる様に頼みました。その係員は荷物受取証を私から取上げてしまいました。というのは、それがないと、その係員は何も出来ないからだと言うのです。私の手許に何の証拠もなくなりました。満洲里で日本側の列車に乗換えました。さしあたりハルピンまで行きました。そこにDさんが、あるホテルの1室を予約していたからです。その部屋の風呂を十分に使わせて貰い、痰壺^{たんづぼ}の様に汚くなってしまった浴槽で十分に時間を掛けた後に、私たちはやっと清潔になったのです。そこから、大連行急行で奉天まで行きました。そこには、両親の友人であるマークス家の方々がいて、私たちを泊めて、お金をくれました。この地でDさんと別れました。彼は更に日本に向かいました。奉天にマイさん、彼も両親の友人であって、イーゲーファルベン社⁴³グループのデーファーク社の支店長でしたが、我々の荷物の問題を彼に説明しました。マイさんは私たちを助けることが出来ました。その会社には1人の荷物責任者がいて、会社の商品輸送を担当していたからです。私たちの荷物の世話を指示されました。2～3日後に電報がきて、私たちの荷物は奉天を通過してしまって、大連に向かう途中だと知らせて来ました。それで私たちもその地まで進む事としました。父があらかじめ書面で頼んであったので、大連は、ニッガーマンさんが迎えに来てくれました。父はニッガーマンさんを知らなかったのですが、同じ船会社の代理店をしていたので、私たちを助けてくれる様に頼む事が出来たのです。最初に私たちの荷物の件で日本の旅行代理店に行きましたところ、そこでは私はお金を請求されました。それは物事が進んでいる証

掘だと思いました。翌日、荷物の鍵束を受取りました。その鍵束を持って税関に向かいました。そこで、私たちは3個の荷物を引渡しました。他の荷物は未だ受け取っていませんでした。そこでカウンターの向こう側に私たちの荷物のうちの4個を見つけました。足らなかったのは2個の若い婦人用スーツ・ケースでしたが、私は偶然にも事務所でそれらを発見しました。そのスーツ・ケースは非常にしっかりと荷造りされていたので、税関ではもう一度開ける事が出来ませんでした。星が浦⁴⁴の宿屋でこれらの2つのスーツ・ケースを開けるのにやっと成功しました。何も無くなっていなかったのも、やれやれでした。上海行きの船便を待つ為に私たちは大連で8日待たねばなりませんでした。船は青島^{チンクオ}を経由しましたので、私たちも数時間の陸上をしました。しかし、覚えている事はありません。上海では、従姉妹のイルンガルト・ゾッベの夫である、カール・ファイゲルが出迎えてくれて、ドイツ人のホテルに1室を予約してくれてありました。上海で日本軍から揚子江を漢口まで遡上する許可を貰うのに14日掛りました。カール・ファイゲルは私たちに10オンスの金の延棒を20本運ぶ様に言いました。これらの延棒を手荷物に分散して、邪魔されないで乗船しました。それから、漢口まで遡上して遂に家に到着するまで3日掛りました。4月の終わりから6月半ばまで私たちは旅をしたのです。

その間に父母はジャーディン居住地に移っていましたので、最早バンドには住んでいませんでした。しかし、事務所はバンドの近くの中心地にありました。

2～3週間後に母は休暇でかなりの期間、日本に行きました。父は私たちにフィアット31型の自動車を練習させましたので、母が帰るまでに私たちは運転出来る様になり、運転免許証も取得しました。私は何回か事務所に行ったのですが、私が出来る様な仕事は何もない事を確認しました。

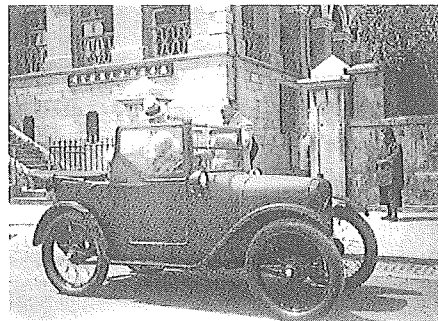


図 21. フィアット 31 型

両親はまだ家で馬を飼っていました。それらの馬で私たちは家まで帰りました。そこから馬場まで私たちが乗馬出来る様です。他のドイツ人たちもまだ馬を飼っていました。楽しく一緒に遠乗が出来たのです。お祭り気分にも成れたのです。

私は自動車の練習を沢山しましたので、父と妹のエーファを事務所まで車で送りました。私が運転すると父は私の自転車に乗って、自動車に固く捕まっていました。その様にして私は家に自転車で帰る事が出来ました。昼休には逆に私が自転車で事務所まで行って、父とエーファ



図 22. 馬と母

を自動車で家に連れ帰りました。

夏は非常に暑かったのです。私たちはいつも浴槽に水を入れて置きました。寝る前に30分ほど自然に暖かくなった湯に浸かりました。気温は45℃まで上がりましたし、湿度は90%でした。

18時頃には風がないでしまい、朝になると再び吹くのです。このような温度ですので婦人や子供は戦時でなければ、山岳地帯に避暑に行くのです。そこではいつも漢口よりも10℃くらい温度が低かったのです。戦争中は避暑に行きませんでした。1940年のクリスマスには私たち姉妹は初めて両親のクリスマス・ツリーの飾付をしました。以前は両親が飾付をしたからです。私たちが住む家は非常に広かったのです。2階には寝室が三つと風呂が二つありました。1階には母のビーダーマイアー⁴⁵期の家具を備えた居間、食堂、母の書斎、それに、パーティ・ルームがあったのです。台所と召使たちの部屋は地下にありました。そこの台所を支配していたのは料理人のシャンでした。阿媽、給仕、苦力がそこに住んでいました。備蓄室もそこにありました。そこから、毎日、その日の為に必要な物、例えば米とか、砂糖とか、ジャガイモとかを、取出していたのです。そうする事は必要だったのです。さもないと、各人の鍋の中で、多すぎる量が消えてしまっていた事でしょう。各人は自分の食べる分は自分で料理していましたので。この時期には使用人たちは給与の一部を米で現物支給されていました。

母が日本から帰って来た時に、私たちが自動車を上手に運転出来る様になっていましたので、^{びっくり}吃驚していました。しかし、私たちは大抵は自転車を使用していました。

夏の殆どの週末にはいつも揚子江を渡って武昌を通り、第2湖と呼ばれた場所に行きました。両親が、支那を離れたあるドイツ人から週末を過ごす家を購入していたからです。私の役割はとりわけいつも週末に必要な物を準備しておく事でした。武昌ハウスの庭師兼守衛は、包装された籠を家に運んでくれました。私たちは後から自転車できたのです。というのは、母はその頃まだ自転車に乗れなかったので、私たち姉妹の1人が徒歩で母の御供をしたからです。漢口では渡し船まで人力車で、武昌では私たちの1人が街の外れまででした。そこからは徒歩で更に行ったのです。武昌では最も必要な物だけしかありませんでした。戦争の間に日本軍によって完全に略奪されつくされていたからです。そして、略奪はまたいつでも起こり得るからです。

湖で過ごしたこれらの週末は素晴らしかったです。私たちはカヌーを持っていました。それは戦争のずっと前から私たちが所有していたのですが、このカヌーで私たちは長い時間を湖で過ごしました。漁師たちから取れたての魚を買いましたが、とても美味しかったです。

両親は日曜日には最後の渡し船で漢口に帰りました。その事は日曜日には早くも16時に立去ると言う事でした。私は翌朝一番の渡し船で行く様に提案しました。夕刻がとても素晴らしかったからです。その事はしかし、月曜日は朝5時に起床すると言う事でしたが、

私には出来ませんでした。

1941年の4月に父は上海に行きました。この機会を利用して、父は私の為に仕事を見つけて来てくれたのです。私はドイツ病院かイギリス病院で働ける様になったのです。私はドイツ病院を選びましたが、給与はイギリス病院よりも低かったのです。しかし私は考えたのです。実習時間に算入して貰えるのではないかと。それなら、またドイツに帰ってより高度な看護婦と助産婦の教育を受ける事が出来るだろうと。

1941年6月22日に独ソ戦が勃発したので、この計画の終りを齎しました。

話すのを忘れていましたが、私は漢口の知人の家で6週間にわたり乳児を個人的に世話しました。その際に稼いだお金は私が自分で初めて稼いだお金です。

上海に於いては乳児や児童の世話をする事は出来ませんでした。その様な診療科がなかったからです。その様にして、私は早速この大病院で働き始めました。私は看護婦として二つの支那人患者ステーションを担当しました。各ステーションには支那人の見習い看護婦2人、苦力1人、阿媽が2人が私の指揮下にありました。二つのステーションを合わせると80人の患者がいました。この病院には6人のドイツ人医師が勤務していました。各医師にはそれぞれ1～2人の支那人助手とかなりの研修医がいました。と言うのは6人のドイツ人医師は全員が独逸支那大学の教授でしたから。この病院は大学病院で、とても、大きな総合病院でした。6人の常勤医に加えて2人の非常勤医も勤務していました。彼らは自分の患者を病院内で措置できたのです。

この仕事を通して殆ど一日中支那人たちと一緒にいたから、支那語をかなり学ぶ事が出来ました。私は4人のドイツ人看護婦の1人でした。両親は上海に知人が沢山いたので、仕事が無い時は多数の招待を受けました。昼休には近所のYMCAに水泳や、バレー・ボールや、バドミントンをやりに行きました。移動手段は自転車か人力車でした。両親が寝台と自転車を漢口から送ってくれてあったからです。病院の5階に、他の3人の看護婦と同様に、私の部屋がありました。その他に5階には大きな屋上庭園がありました。夏にはそこで食事時間の休憩を取りました。暑すぎる時には野外寝台の上で星空の下で眠りました。朝露が酷い際には室内に戻りました。

時間が経つのに従って、馬を所有している人々と知合いになりました。その人々は馬を使用させてくれましたので、勤務が無い時には乗馬を楽しむ事が出来ました。

1942年の初めに6週間の休暇が取れましたので漢口に帰りました。妹のエーファは日本に向かう準備をしていました。私が彼女に東京での仕事を仲介していたからです。彼女は船で漢口から南京に向かい、そこから鉄道で天津に向かいましたが、さらに東京に向かう許可を取るには天津で6週間待たねばなりませんでした。

私は漢口での時間を楽しみました。最後の週の、上海への出発の前に、私はもう一度母と一緒に武昌に行きました。月曜日の朝に揚子江岸に来ましたら、波が非常に高く渡り船は通っていませんでした。母はある尼さんを思い出しました。日本に行った際に知合い

になったのです。彼女は武昌の修道院に住んでいました。私たちはそこに宿泊出来る様に頼みまして、受入れて貰いました。私たちには、母が上海から取寄せたコッカー・シュパニエル犬のヘーティを連れていました。6ヶ月後には再び休暇が得られましたので、漢口に帰りました。その話をもう少し致します。修道院で宿泊した後朝一番の渡し船に乗ろうとしました。勿論多くの人々が一緒に乗ろうとして、待っていま

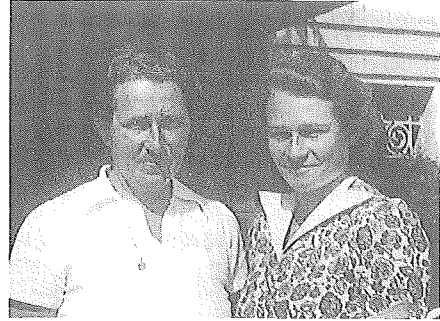


図 23. その頃のリーザと母

した。私たちはヘーティを腕に抱えていました。この小さな犬が人々に踏み殺されない様にはです。日本軍兵士たちが、乗客を整然と並べようとしていました。出札所から乗客を並べる様に鎖の鞭むちを用意してです。幸運にも私たちは何の被害も受けませんでした。無事に家に帰りました。武昌の小屋を最後に訪れた直後に私は上海に帰りました。

母は1941年には6週間後に上海に来て私の6ヶ月の勤務達成を祝いました。私にとつてとともうれしい事でした。と言うのは、ドイツ病院から遠くないドイツ・ホテルに宿泊したからです。空襲警報が発令され、道路に出る事が出来ませんでしたので、一度母のホテルに宿泊しなければなりませんでした。日本軍は総ての交差点をロープで閉鎖しました。私はドイツの民族衣装を着て、特別の身分証明書を持ってはいましたが、使用する事はありませんでした。母は、1941年12月7日⁴⁶の真珠湾攻撃の日にも、上海にいなければなりませんでした。それから、クリスマスから翌年にかけて、母の友人であるフォン・ザルツマン婦人を訪問しました。彼女は日本軍の為に働いていたので都心のホテルに住んでいました。春節の時でした。私たちは最早家に帰る事は出来ませんでした。到るところにバリケードと拒馬シュパーニツェライターが設置され、市街の一部は閉鎖されていました。日本軍が主張したのは、支那人が爆弾を破裂させようとしたからだとの事でした。この様な警備線を越えて、あちら側へ行くなどとても無理でした。私たちは特別身分証明書を提示しましたが、効果はありませんでした。反対に、日本軍兵士たちは銃剣を構えて私たちの方に来て、脅かして追い払い、元の位置に戻ったのです。最後に私たちは警察署に入りました。そこにはベンガル人の英国巡査がまだいました。そこには少なくとも暖炉が燃えていましたし、1杯の温かいコーヒーを貰い、再び温まる事が出来ました。一晩中テレックスの機械がカタカタと鳴り響き、新しいバリケードの徴発を続けていました。私はイギリス人警部に、眠る為に、獄房を使わせて貰うには何をすれば良いかと尋ねました。というのは、翌朝7時に私の勤務が始まるからです。フーン、何も出来ないねと警部は答えました。私は使用されていない机に座って、そこで眠ろうとしました。6時ごろ警察署長が来て、自分の家族のところへ送りました。家族は朝食の最中でした。私たちは一緒に行って、新しいシーツのダブル・ベッドを提供されました。母はベッドに入りましたが、私は入りませんでし

た。寝てしまえば勤務出来なくなってしまうのを恐れたからです。その間、病院に電話して何故来れないのか説明しました。13時ごろイギリス人署長は日本軍の軍曹に私たちをバリケードを通り抜けて家に連れて行って貰う様に頼み、私たちは家に帰れたのです。その後どうなったのか、私は覚えていませんが、母もその後に漢口に帰りました。

その頃に私の従姉妹イルムガルト・ファイゲル(旧姓ゾッペ)が亡くなりました。

主任医師のダウスト博士は日本からの伝道婦人社会奉仕員を引き受けました。彼女たちは蘭領印度⁴⁷から避難してきたのです。尼さんの1人は既に上海に到着していました。上海に親戚がいたからです。その様にて看護婦の数は拡充されました。蘭領印度からの尼さんは5人で、アルヴィーネさんが責任者です。それに加えて、もう1人が来ました。シュテラー修道会からの元尼さんだったポルトガル人が1人です。私が病院宿舎に来た時にいた3人の看護婦のうちの1人が他の病院に移動となりました。1944年の初め頃に漢口での年上の漢口ドイツ人学校の同窓生に招待されました。そこでお父さん⁴⁸と知合ったのです。同窓生の夫が彼の同僚だったのです。お父さんはその家の子供たちとともに仲良く遊んでいました。その後、時々、お父さんをドイツ人学校で見かけました。そこではドイツのニュース映画や他の映画が上演されていたからです。そのうちにお父さんは診察して貰いに2度ドイツ人病院を訪れました。その事でもう少し良く知合いました。そして、おおみそか大晦日の夜に婚約したのです。私たちはその晩にドイツ庭園倶楽部での祝宴にダマース叔父さんと1人の女友達と一緒に参加したのです。叔父さんは休暇で北京から来ていました。少しして私たちは姿を消してバーに行きました。2人だけで更にお祝いする為にです。ダマース叔父さんがまた上海を出発する前に、婚約した事を彼に言いました。その前に両親に電報を打って婚約した事を報せておきました。私たちが婚約を公表する前にです。

しかし、電報の返事を貰うまでに、私たちはもう一度、電報を打たねばなりませんでした。その前に婦長さんには、あらかじめ、結婚の件を報告してありましたので、婦長さんは、私が毎日お父さんと会える様に、私の勤務を割り振ってくれました。私たちはいつも他人から見られない場所に行きました。というのは、大抵の場合に、友人たちは本人たちよりも早く、この婚約の事を知っていたからです。両親からの返事を貰った後に、私たちは婚約を新聞に⁴⁹発表しました。私の同僚の看護婦たちは私の婚約を新聞で知ったのです。私たちが漢口の両親から返事を貰うのに3週間掛かりました。元来、私たちは結婚を4月まで待ちたかったのです。それまでに、私の両親が上海に来れる様に、希望していたからです。しかし、欧州での戦争の状況が非常に切迫していましたので、もはや、結婚するのを待てませんでした。それで、



図 24. 後の夫と一緒にリーザ

教会での結婚式を私の弟の誕生日である1945年2月17日に決めました。戸籍役場への婚姻届出は既に1945年2月12日に致しました。というのは、12日と17日の間の長い4日間は春節であり、その間、全員が休暇を取り、役所も休みになるので、その4日間を、どうしても、2人で過ごしたかったからです。私たちの結婚立会人はエディー・バード叔父さんとイングヴァルド・ルードロフさんでした。戸籍役場のシュタルク係員が婚姻手続きをしてくれました。この人は私を小さい頃から漢口でよく知っていた人でした。教会での結婚式はマース牧師がやってくれました。この牧師には就業禁止命令が出ていました。というのは、彼がキリスト教に転じたユダヤ人に聖餐式を行なったからです。ナチスの時代にはそれは大きな犯罪であったからです⁵⁰。私たちの結婚式でこの牧師は初めて再び説教をしたのです。それで、教会は超満員でした。

結婚衣装はエディーおじさんの妻の仕立屋マミータ・バードさんが、私のデザインどおりに仕立ててくれました。マミータさんのところの婦人帽製作者が、輪型の頭飾で固定して、私のベールをピンで止め様とした時に、チュール⁵¹が縁のところ破れて、長い裂け目が出来てしまいました。それでベールを使用することは出来ませんでした。マミータさんの娘、ティータさんの出番でした。まだ、自分が使った花嫁ベールを持っていたからです。運が良い事にそのベールはまだ綺麗でしたので、ベールの準備も出来たのです。戸籍役場への婚姻届出の少し前に病院宿舎を出て、両親の友人宅に移りました。その家に、私たち2人は教会での結婚式まで居住したのです。私は2月12日にもうちょっとの事をしました。証明書を署名する際にTHを逆に書いて⁵²マルガレーテに押付けました。それまで私はその様に書くのだと信じていたからです。証明書はもう一度書き直して、私たちが署名しなければなりません。婚姻届をした際にドイツ帝国⁵³から『我が闘争』⁵⁴を贈呈されました。私たちはその本を1度も読みませんでしたし、アメリカ軍⁵⁵が上海に到着する前に焼却してしまいました。しかし、また2月17日に戻りましょう。

私たちの結婚午餐会には、ドイツ公使が病気をおして出席してくれましたが、公使夫人はスピーチは公使に代わって、両親の友人であるヴェルナー・アムターゲさんにして貰う様に頼みましたが、この人はお馬鹿さんでブッシュ著の小説の主人公トービマス・クノップの1篇の話を上手に纏める事が出来ませんでした。ブルゴーニュ産のワインと赤いシャンパンで煮込んだハムの料理が出ましたが、私は興奮していて殆ど食べられませんでした。公使官邸に引越しました。仕立屋さんが花嫁衣装をそこに運んでくれましたが、衣装は完璧にしわくちゃになっていました。アイロンをかける為に、木炭アイロンを温めなければなりません。というのは、フランス租界⁵⁶では7時から19

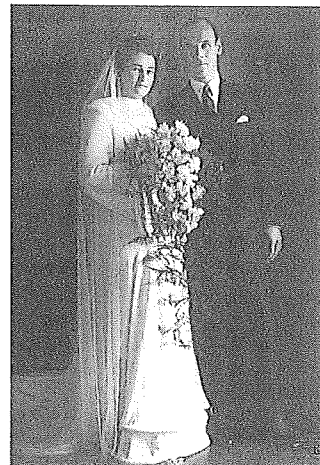


図 25. リーザの結婚記念写真
(1945年2月17日)

時まで停電だったからです。お父さんも慌てていました。というのは花婿から花嫁に送る花束は白いカーネーションと白いスイート・ピーでできている筈でしたが、白いカーネーションしかなかったからです。スイート・ピーは遅れて届きました。お父さんとティータさんは花束を整えるのに一苦労でした。時間は掛かりましたが、結婚衣装を身に付けて、写真屋さんが綺麗な額縁の写真にしてくれました。

全てが昼の日の下で行われ、教会に出発する時間となりました。私たちが望んでいたのは空襲警報が発令されない事だけでした。空襲警報下では私たちの移動は許されなかったからです。公使は自分の自動車を私たちに使わせてくれました。状況が総てこの様でしたから、私たちは早すぎるくらいに教会に到着して、鐘が鳴り始めるまで、聖具室で待機していなければなりませんでした。聖具室には、私とお父さんが知合いになる機会を作ってくれた知人も子供たちと一緒に来てくれていました。子供たちが私たちに花びらを振掛ける役割を果たす為にです。彼女は出産直前でした。私は興奮してしまい、彼女を紹介するのにティータではなく、未婚の時のミス ザックスと呼んでしまいました。

まだまだ遠いのです。教会に入場する際に、非常に多くの人々を見かけましたが、誰も見分けられませんでした。ティータは、私たちが祭壇に歩む直前まで、まだ私のベールと長裾ながすその手入れをしてくれていました。花飾に関しては私の同僚の看護婦さんたちがやってくれていました。これらの看護婦さんたちは私たちの誓いの言葉「あなたの行く所へは私も行く。」を歌ってくれました。しかし、牧師さんは説教に「ターラウのエンヒェン⁵⁷」を付足したのです。その説教はとても私に気に入りました。それで説教の原稿を、牧師さんに頼んで、頂いた程です。今でもその原稿を保管しています。その日は晴れた美しい2月の日でした。参加者全員が挨拶してくれました。それから庭園倶楽部に向かいました。そこでは会長のハンスさんが私たちの為に80名のレセプションを開催してくれました。

私たちの新居の建物はフランス租界にありました。それで昼の間はずっと電気が来ませんでしたから、私たちは薄暗い中で6階まで階段を登らなければなりませんでした。ある夜に私たちはアメリカ軍の飛行機が漢口⁵⁸上空で撃墜されるのを見ていました。その飛行機は、ゆっくりと不気味に、日本軍が1階と地階に弾薬と航空燃料を貯蔵している建物に、向かって来ました。それに加えて近所には、フランス軍の弾薬庫がまだ残っていました。私たちの建物の向かいにも弾薬とガソリンが保管されていました。その間に私は妊娠していたのです。薄暗い中を一人で階段を登るのは危険でした。それで私たちは新しい住居を探したのです。1戸が見つかりました。大きな屋上テラスをそなえた2部屋の住居で物置も付いていました。物置は台所に改装しました。風呂も付いていました。この建物全体は突撃隊⁵⁹の上海司令官に属していました。私たちはこの住居で楽しい時間を過ごしました。所有していたのはベッド1台だけでした。元々は両親の家から持ってきた物で、病院宿舎から運んできたのです。ほかの家具は、とりわけ、もう1台のベッドは借り物だったのです。しかし、ある日、お父さんの蚊帳かやの中で、南京虫を見つけた時に、総ての家具を

即座に返却して、新しい家具一式を買ったのです。

9月には日本軍が降伏⁶⁰しました。間も無く、アメリカ軍と国民党軍が上海に進駐してきました。私たちの家は支那軍の兵隊に占拠されました。あるソヴィエト・ロシア人から、近日中に何か起こると言う、情報を貰いました。金目のものを持っていたとしたら、それらのものを家から持ち出す様に、手配すべきだったのです。大家さんの乳母車の中にかくして、その上に大家さんの幼い娘さんを乗せて、私たちの物を保管してくれる、父の友人のある支那人のところで、総てが解決されました。その間に『我が闘争』も廃棄しました。その本が私たちのところで見つかったら、その本は私たちの重荷になると考えたからです。結局11月には、そこを退去して、バードさんの家のエディーの書斎に潜り込まなければなりません。そこで、ユストス⁶¹の誕生(1945年11月)の8日前からジャネット⁶²の誕生(1947年6月27日)の4週間後まで住んだのです。書斎には風呂が付いていました。その風呂の中に木炭や卵形練炭を使用する支那^{かまど}竈とアルコール煮炊き器を置いていました。朝食と、お父さんが事務所を持っていく昼食用の弁当を、料理したのです。その他にも衣類やおむつの煮沸洗濯をしたのです。その頃、バードさんの家には既に兵隊たちが地下に住んでいたのです。兵隊たちはいつも電話していました。エディー叔父さんは電気の使い過ぎという理由で高額な罰金を支払わなければなりません。朝も夜も点灯しなければならなかったのに、電気は制限されていました。それで、電熱器の使用は許されませんでした。時には薄暗い石油ランプの下で生活しなければならなかったのです。

ユストスの出産予定日の8日前でした。夜間外出禁止令が出ていましたので、お父さんは、毎晩、病院に私を訪ねて来て、翌朝、私を迎えに来ました。というのは、バードさんが絶対に子供を家で生まない様に希望したからです。エディー叔父さんは、「私は外科医です。出産については何の知識もない。」と言いました。1945年11月30日は寒い日でしたが、お父さんは病院に私を迎えにきました。しかし、私が病院に留まる方が良いと思いました。私たちには寒すぎる日だったからです。最初、お父さんは私を迎えて昼食に行こうとして、やって来たのです。食事をする予定の食堂に着いた時に、引返す事が出来ました。正に陣痛が始まったからです。ユストスがこの世界に出てくるまでには、翌朝3:30までかかったのです。ところで、ユストスは私が本来勤務していたパルーン病院ではなく、仮病院で生まれたのです。というのは、日本軍は、ドイツが降伏した後に私たちを病院から追出したからです。それで、ツンシ大学に所属していた、ある建物に病院を設立したのです。私が退院できる日に、私はエディー叔父さんと家に車で帰らなければなりません。というのは、お父さんは、ヴェルナー・アムターゲさんと漢江から来たお祖母さん⁶³を迎えに、港



図 26. リーザと長男ユストスと母

に行きましたので。私の父はその間の1945年8月に漢江で死亡しました。

お父さんはアムターゲさんと一緒に行ったのは、まだお祖母さんに会ったことが無かったからです。

しかし、エディー叔父さんは病院に私を迎えに来るのを忘れました。それで私は赤ちゃんと一緒に人力車で家に帰りました。病院は宿直勤務をさせてくれました。宿直勤務は食事代など一切が無料でした。外出禁止令によって困難が増さない様です。

母(お祖母さん)は嬉しい再会が出来ました。初孫と会う事が出来たからです。悲しい思いは勿論の事でした。父を迎える事が、もはや、許されなかったからです。

母は私たちのところには住みませんでした。自分の友達の所に住んだのです。自分の住居から追出されるまでです。パートさんの所にはまだ母への住居がありました。母はガラス張りのヴェランダの一部に居を定めました。暖房には石油焔炉こんろがあるだけでした。朝食を準備する際には、その焔炉をテーブルの下に置いていました。(室温は2℃でした。)その焔炉で、私たちは少なくとも足と膝ひざを温める事が出来ました。私がユストスの世話をしている間に、母は朝食を調理してくれました。居間には、夜になると、ポルトガル人の大家さんが寝ていました。この家が敵国財産でない事を支那人に証明する為にです⁶⁴。

エディー叔父さんの書斎だった、私たちの部屋には大きな事務机がありました。私たちは隅っこにその机を押し付けておいたのです。その机の上の、一方にユストスの揺籠ゆりかごがあり、他方におむつの交換台がありました。食事にはトランプ机を使用しました。その他には私たちのベッドだけで部屋は一杯でした。母が、日中はベッドを重ねて置いては、と言ってくれましたので、より広い空間を得る事が出来ました。そのようにしてユストスの為の場所を配置する事が出来たのです。(続)

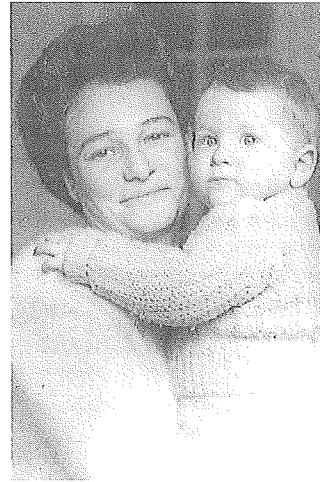


図 27. リーザと長男ユストス

(註)

- 38 西から行くと東プロイセンの入口にある都市、1945年以降はポーランド領となりマルボルクと称す。
- 39 東プロイセンの国境の都市、1945年以降はロシア領となりチェルニシエフスコエと称す。
- 40 ロシア側の国境の都市。
- 41 ラトヴィアの首府。
- 42 ソ連の旅行社。総ての外国人旅行者はここを通して旅行を予約支払させねばならなかった。
- 43 ドイツの巨大化学企業で戦争協力したとして戦後解体された。バイエル、ヘキスト、BASF 社は皆この傘下にあった。
- 44 大連の海水浴場、日本統治時代には星が浦と呼ばれた。現在は星海公園と呼ばれている。
- 45 1815のウィーン会議から1848年の3月革命までの非政治的な小市民生活の時代。
- 46 真珠湾攻撃はアメリカ時間では12月7日だが、日本時間、上海時間では8日である。

- 47 現在のインドネシア、当時はオランダの植民地で、日本軍が占領中。
- 48 リーザは自分の子供たちに自伝を物語っているの、日本人と同じように夫の事をお父さんと呼んでいる。
- 49 ドイツでは婚約や、結婚や、死亡についての広告を新聞に出す風習がある。
- 50 ユダヤ人を定義するのは難しい。ユダヤ教徒をユダヤ人と定義するのが一般的であるが、ナチスはユダヤ人を人種だと規定した。従って、ユダヤ人がユダヤ教を棄ててキリスト教徒になっても、その人は依然としてユダヤ人だとするのがナチスの立場であった。
- 51 ベールなどに用いられる網目状の薄い布。
- 52 リーザは漢口で生れ育ったので、文字の書き方も英語式でドイツ語式の文字の書き方に慣れていなかった。この様な事が生じた。
- 53 当時のドイツは Deutsches Reich と呼ばれ、ドイツ帝国と訳すが、皇帝のいない共和国。
- 54 ヒトラーがクーデターに失敗し、獄中にいたとき書いた、ナチスの運動方針。
- 55 1945年8月15日に日本の無条件降伏が公表され、日本軍降伏手続に米軍が進駐した。
- 56 支那が欧米列強の半植民地になった結果、支那の大都市の一区画がそれらの国の租界とされ、その中では欧米本国の制度が適用された治外法権の場となっていた。
- 57 東プロイセン方言の歌。
- 58 上海の間違い。
- 59 SA と略称されるナチス党の実力部隊。デモや集会で共産党などと乱闘した。
- 60 日本が降伏を公表したのは1945年8月15日である。正式に降伏したのは9月2日であるが、その前に米軍の進駐が始まった。米軍の上海進駐は9月になった。
- 61 リーザの長男。
- 62 リーザの長女。
- 63 リーザの母。リーザの子供たちにとってはお祖母さん。
- 64 ポルトガルは第2次大戦中には中立を通したので、支那の交戦国ではなかった。

Die Geschichte von Lisa Fritsch (3)

Hajimu WATANABE

Graduate School of Science and the Humanities

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, 712-8505, Okayama, Japan

(Received October 1, 2011)

1940 hat Lisa geplant, über Sibirien nach Hankou zurückzukehren. Sie mußte mit dem Zug bis nach Rußland fahren. Von Moskau ging die Fahrt über Sibirien nach Mandschu weiter und mit dem Schiff von Dairen über Tsintau nach Shanghai, weiter nach Hankou. Von Ende April bis Mitte Juni war sie unterwegs.

Im April 1941 hat sie angefangen, als Krankenschwester am deutschen Krankenhaus in Shanghai zu arbeiten. Weil sie dann in Deutschland noch eine höhere Ausbildung anstrebte, und man die Arbeit in einem deutschen Krankenhaus als Praktikum anrechnen würde. Aber der Ausbruch des Krieges zwischen Deutschland und Rußland am 22. Juni 1941 machte ihrem Plan ein Ende.

Sie arbeitete in dem deutschen Krankenhaus in Schanghai. Am 8 Dezember begann der Krieg zwischen Japan und Amerika. In der Weihnachtssaison gab es in Shanghai überall Barrikaden und spanische Reiter. Japanische Soldaten gingen mit dem Bajonett auf sie zu und scheuchten sie zurück.

In den ersten Monaten des Jahres 1944 lernte sie ihren späteren Ehemann kennen. Ein Jahr später, am 12. Februar 1945, heirateten sie standesamtlich. Bei der Gelegenheit bekamen das Ehepaar vom Deutschen Reich ein Exemplar des Buches „Mein Kampf“ geschenkt. Ihre kirchliche Trauung fand am 17. Februar 1945 statt. Im Mai hat das Deutsche Reich kapituliert, und das deutsche Krankenhaus mußte gezwungen von den Japanern von seinem Gebäude in ein Haus der Tungshi-Universität umziehen.

Im September 1945 kamen, wegen der Kapitulation von Japan, die Amerikaner und Nationalchinesen nach Shanhai. Lisa und ihr Mann mußten, da sie staatsfeindliche Bürger waren, ihre Wohnung verlassen und zu Freunden umziehen. Das Leben gemeinsam in einem kleinen Zimmer war sehr unangenehm, dazu mangelte es an Gas und Strom. Sie mußten sich mit einem chinesischen Holzkohle- oder Eierbrikettofen und einem Petroleumfunzel zufrieden geben. Unter solcher Not wurde ihr erstes Kind geboren. Ihr Vater verstarb 60jährig in Hankou, und ihre Mutter kam nach Shanghai, um mit Lisas Familie zusammen zu leben.